

---

# やっちまった!!

萌須田 萌葱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

やつちました！！

### 【Zコード】

Z6578A

### 【作者名】

萌須田 萌葱

### 【あらすじ】

極々普通の高校生の渚、姉の仕事の用事で地元に戻ってきた彼が入った共学はなんと去年まで女子校だ！？

## 第一話～お約束～（前書き）

初投稿なのですよ！

思いつきり緊張ですねw

今作のはかなり個人的趣味要素が強いかもなので

ご承知ください^ ^；

でわお楽しみくださいw

## 第一話～お約束～

### 第一話～衝突～

どうも、今作の一応主人公核の渚です、  
名前はあれですが男です、  
全く作者も何考えてんですかね、男が主人格とは……  
とりあえず僕の容姿は  
身長170、体重58、文武両道、才色兼備だそうです。  
あくまで姉の談です。

いま僕は姉の仕事の都合で昔住んでいた町に戻つてまいました。  
さてある程度の紹介も済みましたし話の本腰に行きましょう。

「さて、今日から学校か」

そんな事を言つて家を出る僕、今日から此方の学校に転校です、大  
丈夫、作者の大好きな  
女子高に間違つて編入なんてことはありません、  
しつかり確認しました、この町唯一の学校ですけど  
共学です、100回近く確認しました、

作者の思い通りにはいきませんよ。

そもそも女子校なんて通えません、なぜなら…  
そんな事を思つて走つていると、行き成り曲がり角から人が  
無論、避けれません。

「ぬああ！！！」

「ひやあ！？」

はい、ドシーン、全く作者めなんてお約束なんだ、  
どうせこのまま

「だいじょうですが、お嬢さん?」

「あつ有難う御座います、」

「ハンカチどうぞ、」

「有難う御座います、あの洗つて返したいので住所と電話番号」（以下略）

なんて展開にはならんのです、なぜなら

「あ、あの? 大丈夫ですか?」

よつて来る少女、歳は同じくらいでしょうか?

肩くらいまである、薄い茶色の髪、柔らかな表情で言い寄つてきます、

「あ、いや、全然大丈夫だから」

声が裏返ります、これが僕の最近の悩みの種、

年頃の男の子（つても高校一年生）としてはあるまじき

病気（？）

女性恐怖症、です。

兎に角そそくさとその場から逃げ出した僕でした、

僕は逃げるのに必死で落とした物に気付きませんでした。

「あれ、行っちゃった」

そして彼女は視線を下にやる、

そこにあつたのは一つの生徒手帳、それを手に取り

「……渚、ふふつ女の子みたい」

そんな笑みを浮かべる少女、そして少女も時間に少し遅れていることに気付き走り出す。

## 第一話～お約束～（後書き）

第一話、お楽しみいただけたでしょうか？

お楽しみいただけたら幸いです。w

これはそこそこ続く予定で御座いますのでよかつたら

お付き合いをw

読み終わった後で誤字、脱字などありましたら  
ビシビシ指摘してください。

でわでわ

## 題2話～なんていった～（前書き）

いつも、題2話のお届けです w  
つても連続投稿ですがね w w w  
今回も渚君がとんでもない日にー? ?  
でわお楽しみ下さこ w

## 題2 話へなんてこつた

僕は走っていた、なんか余計なことを考えていたせいでかなり時間をくつたのだ

転校初日から遅刻は避けたい、

全力疾走のかいあつてかそれなりに余裕を持って登校できた、そして当りを見回す、

「ん?なんかやけに女子が多い気が……」

いやいやそんなはず無いたまたまたまたまたま、

ここは共学なんだから、うんそうだ

そんな事を思つて職員室へ向かう

「失礼しまーす」

そして言われていた名前の先生を探し出して話しをすすめる

「しかし君も大変だね、男の子一人で」

一瞬耳を疑つた、男の子一人?

「えつでも此処は共学じや!?

「あーそれはね、実は今年から入ってきてね、それでここを女子校から共学にするつてことになつて」

なんてことでしょう、作者にまんまとやられました、

そういうこの高校はいまだ女子校否秘密の花園として君臨しているのです!!

そんな中にむさい男が入つていいものでしうか?

いやいや、受け入れてもらえるはずがありません。

ああ、僕は一体どうしたらいいのでしょうか。

そんな思い足取りのまま教室へ、

確かに、女子だらけの中に男一人と言つのもそうですが

なにより僕は女性恐怖症なのです!!

女の子だけなんて無理です!!しなじゅいますよ!!

そんな心境でしです教室前、先生の声が聞こえる

「あー皆、今日は転校生がくる、さつ入つてくれ」

ガララッと扉が開く音、そして教室に入つた瞬間

「さやああああ！」

と言つ女子の声（姉談の）才色兼備などが功をそつしたのかそんなに嫌悪否いれは歓迎されるのだろうか？

この調子だと先のことが分かる。

気分が悪い、今は放課なのだが案の定今は女子の質問攻めにあつていた、

こんなに周囲をかこまれたら気分が悪くなるのも止むを得ない。

僕は逃げるようにして教室を出た、保健室にでも行こう、すこし寝てれば気分もよくなるはずだ

そんな事を思つて歩いて歩いていると後から

「あつあの！」

何処かで聞いた声、しかもとても最近、僕は後ろに振り返つた、そしてそこに居たのは。

今朝の女の子だったどうしたのかと聞くと彼女はポケットから一つの手帳を取り出した、真新しい生徒手帳

「あの、これ朝落としましたよ」

受け取つて表をみると確かにそこには名前が書かれている。

僕の名前だどうやら今朝落としたらしい、

「あつ有難う、」

又声が少し裏返つてゐる、

彼女は不思議そつに見てくる、はやく行かねばと走りだそつとしたとき、

「渚……君つて言つんですね、初めまして」

「あつ初めまして」

ついつい答えてしまつ、

「私は空つていります、ワロシクね」

空ははにかんだ笑顔を見せます、その顔に一瞬  
ドキッ

少し鼓動が高鳴るのが分かりました、

つて僕は何、ドキドキしてるんだ、相手は女の子なんだぞー！？  
しつかりしろ！！渚！！

そういうつて自分の気を引き締めなおして

「あつあの、僕少し気分悪くてさ、保健室行くところだから、じゃ  
ね」

そういうつてそそくさ保健室へ行こうとしたら、

「あつじやあ私も一緒に行くよ、先生に報告する人が必要でしょ  
う？」

確かにその通り、僕は仕方なく彼女と一緒にいます。

大勢の女子に囲まれるよりまだましです、

それに報告さえ済めば行つてくれますし。

そして保健室にはいつて僕は先生に状態を説明して  
ベットで寝かしてもらえることにて、これで安息できます、  
しかし保険の先生がいきなり。

「あー、空、私は今から少しここを出るからそれまで看病頼んだな  
となんと言つことでしよう！…」

女の子と保健室で一人つきりです！…よくもやつてくれましたね作  
者！！

ああ何だか本当に具合が悪くなつてきました、  
めまいがしてきます、そんな時、

ピトッ

つと額につめたい感触、彼女が僕の額に手をやつてるのです、  
一瞬血の気が引きましたがそれと同時に鼓動が早くなります、  
ああー！全然鼓動が收まりません、何だか顔も熱くなつてきました  
し！！

そんな事を思つていると彼女は

「すつすごい熱、大変！…私先生に知らせてくる！…」

そういうて走つていいく彼女、

なんだ熱ですか、そうですがそうですか、  
どおりで心臓がバクバクするは顔が厚くなるわけです！！！  
安心、安心、

時は夕方、僕は38度もの熱をだして早退しましたが家にかえつて  
少ししたらたちまち回復、

やはり女性恐怖症からきたものようです。

そんなこんなですっかり家でのんびりしていると

ピンポーン

つとチャイムの音、玄関に出ると

「あつ渚君、もう体調いいの？」

玄関に居たのは空ちやん、ビラセニアプリントを持ってくれたぽ  
いです、

彼女はいつもの笑顔でたつていて、なんだか返しづらいです、

「あの、良かつたらお茶でも飲む？」

ああ！！僕は何を言つてるんでしょう！！今日知り合つたばかりの  
人を！！それも女の子を自宅に誘うなんて！！

勘違いされてもおかしくはありません！！

「えつ！？いいの？じゃあお言葉に甘えて～」

彼女はなんどえへへ～ってな表情で我が家に上がつてまいりました  
！！

あーもう、もう少し警戒心を持つたらどうなんでしょうか…！

とりあえず彼女をリビング謙応接間へといざないます

そしてお茶を持ってきてしばしの雑談となりました

そして今日もらつたプリントを取り出して

「あのね、渚君、明日からひの学校全寮制にするんだって……！」

「えつ…………えええ！……！」

なんとこいつでしょ、全寮制なんていつたら周りはみんな女の子ですよ……！」

まったく作者め……何処までお約束なんだ……！」

しかもすでに部屋振りまで決められてるではないですか……！

僕と同室なのは…………っ……！」

「渚君一緒に部屋だねー、よろしく……！」

ああ何だか意識が遠のいてこきます、

また顔が熱くなってきて……

ドサッ

「えつ！あれ！？なつ渚君！？」

その後僕は姉さんが帰つてくるまで氣絶していくずっと姉ちゃんが看病してくれていたそうです。

それについても明日から寮生活です、

僕はこのままどうなつてしまつのでしょうか？

## 題2話へなんていつた（後書き）

題2話、お楽しみいただけたでしょうか?  
お楽しみいただけたのなら幸いです。  
また誤字、脱字等御座いましたら  
ビシビシ指摘してください。  
でわでわ

## 第三話～サキュバス～（前書き）

連続投稿第3回！！

はい、すいません。

実はこれ少しだけ書き溜めがあつたのでそれを  
一気にUPしてるんですよね。

でわでわお楽しみ下さい。

## 第三話～サキュバス～

朝、清々しいほど晴天、でも僕の心は重い、  
肩には旅行鞄、中は衣服等の生活用品。  
旅行ではありません、今日から寮生活です、  
しかも女の子と……

先が重いられます、

そんな事を思つて歩いていると

「あ～渚君～」

朗らかで可愛らしい声、その聞きなれた声の方へ振り返ると一人の少女がいた、

肩くらいの長さの薄い茶色の髪、柔らかな表情、

美しいといつより可愛らしいと言つ表現がぴったりな女の子、空ちやんだ、

彼女は両手で大きな旅行バックを持つていて、

そして学生鞄、彼女はバックは僕のより同じまたはそれは以上、女の子だ、色々と居るものもあるのだろう。

そう思つて立つていると彼女は僕のところまで来ていた。

急いできたのか息が切れている、あたりまえだろう、彼女のような細身な体での旅行バックを運べているのが不思議なくらいだ。この調子だと一緒に歩くことになりそうだが彼女の今のペースでは遅刻ギリギリになりそうだそんな事を思つていて、

「あの、よかつたらバック持とうか？」

あー言つてしまつた、馬鹿か僕は。

そんな事を思つていると彼女は何故が顔を赤らめ

「えつ！？いや、そんないいですよ、思いですしだす……」

「でもこのままペースだと遅刻ギリギリだし……」

マイマイ分からなかつた、何をそんなに遠慮するのだ？

このへりこの行為どうつて事ないと思つ。

でも僕がそう言つと彼女は頬を上気させたまま、

「はい、でわ…お願いします」

「うん、」

そういうて僕は彼女のバックも持つた、確かに僕のよりも重いがたいした苦ではない、小さい頃から姉にしごかれてたのは伊達ではない。そして歩いていく、しかし未だ思う、何故彼女はあそこまで恥ずかしがつて頬を赤らめたのか、全く鈍い奴である～

「？」

どつからか声が聞こえたけどまあいいか。

そんなこんなで歩いてる間はほとんど口を交わさなかつたが、寮の前に付いたとき、彼女が靴を開いた。

「あつあの、ここからは自分で持ちますので」

「あつそつ？じやあはい」

そういうてバックを渡す彼女は少しよろけるが体制を立て直す。そのまま自室となる部屋に向かつ、僕達の部屋は

405号室、どうやら一人一部屋なそうです。

扉を開けると中はなかなか広く快適そうだ。

洋服、ダンスが一つ、キッチンに予備用のフロ（どうやら大浴場があるようだ）そしてベットが一つ、

……つてちょっと今までええええ～！

なんだベットが一つなんだよ～！確かにタブルベットだけど～…ちよつとまで～！俺は男だ～！そんなの無理にきまつているだろ～！

「わ～、広いね渚くん」

そうやって気楽に言う彼女、あー参つてしまつます、しかし彼女はベットなど氣にも留めません、

ベットの事をいつても「それで？」の一言です、

あああ～！もう駄目です～！

そしてそのまま半脱力状態で学校に向かいます、

案の定、学校では昨日の続き質問攻め、やはり気分が悪くなりましたが耐えました、僕ってやれば出来る子なのですね。

そしてくたくたになつて夜、お風呂（備え付け）に入り夕食の時間、この場合は自炊か食堂があるのでですが彼女はどいつも自炊をするようですが

しかも今夜は任してくれとのことですのでお言葉に甘えます、しかし自炊がはじまって数分、此方に届いたのは、

悲鳴&amp;・煙&amp;・焦げた物体

失敗のようです、彼女は半泣きになりながら、

「あうう、『めんなさい』」

しかたありません、このままでは晩ご飯にありつけそうに無いので、

「じゃあ僕がやるよ」

「えっ！？渚君ですか！？」

そういうて驚く彼女、僕は彼女に待つててといってキッチンに向かう、そして、数分後できたのは

普通の料理、彼女は驚きの色を隠せてません。

そして一口、途端に

「美味しい」

彼女は感心しながらぱくぱく食べていく。

急がなければ僕の分までなくなってしまいます。

そして食後、しばしの雑談後（彼女が身を乗り出したりしてすこしひが冷えましたが）もう時間は11時、そろそろ寝なくては。僕は毛布に包まり、ソファに寝ころがります、すると彼女は

「あれえ？渚君ベットで寝ないの？」

すでにパジャマに着替えた彼女が問いかけてきます。  
はい、そうです、寝ません、てか寝れません。

貴方は運がいいですよ、僕が普通の男だったらすでにあなたは大変なことになつてますよ？

そんな事を重いながら丁重に断つた僕は電気を消して眠ります。

夜中、さすがにソファねにくいです、外は涼しそうなので少しすずむひとでまじゅう、

中庭、涼しい風が吹きます。

そして僕は歩いています、そして木の陰に倒れ掛かっている人があります、

つてええ！？

ちよつ！…こんな時間帯に何故、近寄つてみると倒れ掛かっているのは女の子、身長は小柄な空ちゃんよりも小さい、とりあえずこんな所に寝ていたら風邪を引いてしまったので起こします、少し肩を叩くと彼女は目を開け

ドサッ

つえ？なんか僕押し倒されてません？

普通は逆だとおもうのですが、つて言つか何ですかこの状態は！？ええ作者！！

そんな自問はさておき、  
僕は女の子の顔を見ます、瞬間、

ドクンシッヒ一気に鼓動が高鳴ります、顔が一気に赤くなるのが自分で分かります。

どうしたものでしょ、頭の中では女性恐怖症の恐怖が渦巻いてます、しかし胸の高鳴りも顔の上気も止まりません。

彼女の顔をもう一度みると、

小さくすつきりした顔、綺麗に伸びた睫毛、整えなくとも綺麗な眉、ほんのりピンクな潤んだ唇、

空ちゃんの可愛いというのとは別に妖艶ともいえる、美しい、の一言に及ぶる容貌、

しかし何かがおかしい、確かに美しい、しかし僕は女性恐怖症、しかも重度堅物なのです、この手に関しては特にです。しかし彼女の前ではそんな理性がいとも簡単崩されてしまします、しかし僕はそんな簡単には朽ちません、さつきから拳を握り爪をつきたてて耐えます、

しかし彼女はなにかフェロモンとも妖氣とも言えるこれはまるで昔話なんかでてくる、

淫魔、否サキュバスである、

完全無欠の美貌、そして男を魅了して止まない謎の力、まさに彼女はそんな者だつた。

しかし僕は理性を振り絞つて

「あっあの、どいてください」

そういうわれると彼女は驚いた顔をして、少し間をおきどいた。

そして僕は彼女に

「あの、こんな所で寝てると風邪ひくから、寮に帰った方がいいよ」

そういうつて僕はそそくまと自室に戻つた。

去つていく少年の後姿を見つめ、少女は怪しげな笑みを浮かべる。

「ふふふ、この私から逃れるなんて」

そして彼女の目はまるで獲物を見つけたような目をして

「ふふ、面白いわね……」

そして彼女も又闇夜に消えていった。

## 第三話～サキュバス～（後書き）

どうでしょ？第三話～サキュバス～、楽しんでいただけでしょうか？

楽しんでいただけたなら幸いです。

あと一人か二人ヒロイン追加予定です。W  
でわでわ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6578a/>

---

やっちました!!

2010年12月19日00時13分発行